

〈書評〉

Charles Zika, *The Appearance of Witchcraft: Print and Visual Culture in Sixteenth-Century Europe*, Abingdon, Oxon, Routledge, 2007, pp. xiv+298.

竹 澤 美 桜

本書は、15世紀後半に魔術に関する図像が現れ始め、16世紀後半までにそれらが視覚文化の主題として体系化されていく過程を論じた大著である。本書を著したのはオーストラリアの文化史家チャールズ・ジーカであり、その研究は中世後期から近世初期にかけての北欧と中央ヨーロッパ、特にドイツ語圏の文化史、宗教史、視覚史と多岐にわたる<sup>1)</sup>。

具体的には、本書は、どのような経緯で魔術が視覚的に描かれるようになり、画家と印刷業者がいかにして魔術に特別な視覚的形態を与え、彼らと鑑賞者たちが魔術をどのように認識し、理解したのかについて探ろうとするものである。これらの目的のために、ジーカは次の3つの課題を設定する。まず、魔術という概念と、当時の視覚文化における他のモチーフやテーマとの間にある関連性を明らかにすることで、特定の視覚イメージの文化的重要性和感情的な力を特定し、魔術という新たな視覚上の主題が16世紀に生み出した広範な文化的意義を明確にすることで。次に、15世紀から16世紀にかけての魔女像の発展の中で、図像が果たした役割を評価しようとするものである。そして、16世紀の魔術の図像の歴史と、魔術に関する文学や法律の歴史にどのような差異があるかを見定めようとするのである。

第1章「魔術のための新たな視覚言語の創造」では、16世紀初頭に南ドイツの画家たちが魔術の視覚上の符号を発展させていった過程を論じている。この発展は、以前から存在していた魔術イメージを利用したも

1) <https://findanexpert.unimelb.edu.au/profile/12644-charles-zika> (最終閲覧日 2025年10月27日)。

ので、ジーカは、15世紀後半のウルリヒ・モリトールの著作の挿絵として掲載された6枚の木版画がその起源であるとする。これらの木版画には、魔術を個人による行為としていたそれまでの伝統的なイメージから、女性が集団で行う行為へと徐々に変貌していく過程が現れている。そして16世紀初頭にこうした魔術イメージを発展させ、新たな魔術の視覚表現を確立した画家として、南ドイツの画家ハンス・バルドゥング・グリーンを挙げる。1510年に彼が制作した木版画に描かれた、大釜の周りで魔術を行う女性の集団と、動物や二又に跨り空を飛ぶ女性は、16世紀の魔術の図像表現における新たな視覚上の符号として、その後1世紀以上にわたり利用され続けることとなった。これらは、バルドゥングと同時代に活躍したアルブレヒト・デューラーとアルブレヒト・アルトドルファーの作品にも描かれていることから、ジーカはバルドゥングが彼らの作品も参考にした可能性が高いとする。ジーカはバルドゥング、デューラー、アルトドルファーの作品を考察することで、15世紀後半のモリトールの著作の挿絵を通じて新たな図像表現への模索がなされた後、16世紀初頭に魔術の視覚言語がいかに大きな変容を遂げたのかが明らかになると主張する。

第2章「15世紀の呪術と魔法の変容」では、15世紀の画家たちが民衆魔法 (popular magic)、呪術 (sorcery)、魔術 (witchcraft) を描き出すのに用いた視覚資料やモデルを調査している。16世紀前半に確立した、新たな魔術の視覚表現の基であるモリトールの著作の挿絵は、1490年代以前から見られる民衆魔法・呪術の概念を参考にして描かれたのではないかと、ジーカは推測し、ハンス・フィントラーの1486年の著作に掲載された木版画を中心に論じている。これらの木版画の特徴としてジーカは、同時代に見られ始めた、日常に根差した魔法や呪術の悪魔化の兆候がほとんど見られない点を指摘する。他方で、15世紀に制作された降霊術、召喚魔術、異端としてのワルド派などを描いた図像では、魔法や呪術の悪魔化が徐々にではあるが強調されていた。中でもワルド派を描いた図像は魔女のサバトの場面に近く、悪魔への服従が前面に押し出されている。その中には騎乗する魔女も描かれており、16世紀の魔術の視覚上の符号との繋がりを想起させる。しかし、悪魔崇拜の要素は17世紀になるまでほとんど描かれなかったことから、ジーカはワルド派の図像が後の魔術の視覚表現を確立する上で決定的な役割を果たしていたかにつ

いては疑問視する。

第3章、及び第4章では、第1章で検討した2つの魔術の視覚上の符号についてさらなる検討が行われている。この2つの章でジーカは、16世紀前半の魔術と、女性のセクシャリティ及び性的無秩序に関する言説との関連性について論じている。まず、第3章「魔女の大釜と女性の身体」では、大釜と女性の体内に宿る肉欲との関係が取り上げられる。魔術の図像において大釜は、抑制されない女性の肉欲を表すものとして頻繫に描かれた。というも、大釜は女性の肉欲と性的な力を象徴するもの、例えば燃え盛る松明やパンドラの箱を連想させたからであった。この関連づけにより、大釜は、自然界に破壊的な力を解き放つことで人間の生産と生殖を脅かす存在として魔女を表象させただけでなく、その肉欲によって道徳的・社会的秩序をも脅かす存在であるとされた。

第4章「荒々しい騎行者、民間伝承と道徳的無秩序」でジーカが主に用いた視覚資料は、ドイツの画家ルーカス・クラナッハが1528年から1533年にかけて制作した、メランコリーを題材とした4枚の絵画である。クラナッハは、これらの絵画に「荒々しい騎行」(Wild Ride)や「激怒した大群」(Furious Horde)といった民間伝承に由来する集団のイメージを組み込んで描いた。この集団は動物に跨り空を飛ぶ荒々しい裸の女性たちとして描かれている。これはクラナッハが魔術を性の反転や男性の性的無力化、道徳的な破壊や無秩序と結びつけていたことの表れである。またジーカは、「荒々しい騎行」と中世のウェーヌスベルク伝説との関連も論じている。ウェーヌスベルクとはヴィーナスが支配する山の楽園で、性的快楽の場であると同時に魔女たちの集会が開かれる場とも見なされていた。クラナッハは「荒々しい騎行」を、メランコリーが持つ罪深さと悪魔的な性質を強調するものとして表現するのと同時に、そこにウェーヌスベルク伝説が持つ性的快楽、性の反転、男性の性的無力化を結びつけることで、女性の性的な誘惑との関連性も浮き彫りにした。クラナッハはこれらの絵画において魔術の表現を新たな方向へ発展させつつ、同時に16世紀初頭の画家たちが築いた、その意味の幅を広げていたのだとジーカは指摘する。

第5章「古典世界における変身、死、セクシャリティ」でジーカは、古典文学の登場人物たちをモデルとして制作された魔術の図像と、これらの図像が新たな魔術の視覚言語の形成と信頼性の獲得にどのように貢

献したのかを考察する。例えば「運命の三女神」は、魔女が生と死を司る力を持っていると信じられていたことを伝えるために利用された。また、キルケーやメディアといった古典神話に登場する魔女たちは、魔術と変身の関連性を正当化し、15世紀から16世紀にかけての魔術イメージの形成に貢献した。彼女らが持つ力は、動物界と人間界の境界、そして生者の世界と死者の世界の境界を行き来する能力であった。この力は魔女自身、あるいは犠牲者の性的欲望によって刺激され、駆り立てられたものとされた。ジーカは、古典文学に登場する魔女たちのイメージは、変身や死に関して彼女らが持つ決定的な力の認識に大きな信頼性を与え、歴史を通じてそのような魔女像の存在と力を確証するものでもあったはずだと指摘する。

第6章「聖書に登場する降霊術師と2人のキリスト教の聖人」では、キリスト教の伝統に由来する悪魔的な魔術をテーマとする物語をいくつか取り上げ、16世紀の画家たちが新たな魔術の図像表現をどのように活用し、これらの物語に同時代的な関連性を与えたかについて考察する。例えば、エンドルの魔女とサウル王の物語では、エンドルの魔女は悪魔的な力を用いて降霊術を行うとされた。画家たちはこれらの物語の図像の中に、16世紀に発展した新たな魔術の視覚上の符号を描き入れることで、同時代性を付け加えた。これらの図像が重要であるのは、単に伝統的な主題と様々な形態の魔法や呪術、魔術との間に生み出された関連性を示すからだけでなく、画家たちが、悪魔の力に対するキリスト教徒の闘争の長い歴史の中に魔術を位置づけようとしたことにもあったとジーカは主張する。

第7章、及び第8章でジーカは、16世紀後半の魔術の図像と、煽情的で異国的なものの表現との関係について考察する。第7章「ニュースを報告し兆候を読み取る」では、パンフレットやビラなどを通して、魔術と印刷物が新たな形で結びついた様子を論じる。この章では、ドイツで刊行された魔女に関するパンフレットやビラが数多く紹介・分析されており、これらが16世紀後半の魔女裁判の件数の増加とともに発行されるようになったことが指摘される。これらの印刷物には煽情的な見出しが添えられただけでなく、記事の要点を図像にしたものも掲載され、読み書きのできない人々にもその内容を伝えることができた。そして、このような印刷物の中で最も内容が豊富で示唆的なものとしてジーカは、16

世紀後半にスイスの牧師ヨーハン・ヤーコブ・ヴィックが編纂したいわゆる「不思議の書」(Wickiana)を挙げている。「不思議の書」は、ヴィックが集めた同時代の扇情的な出来事について記録したものである。その中には1000枚を超える挿絵が収められており、そのうちの30枚以上が魔術に関わる場面である。ジーカは、「不思議の書」のような16世紀の印刷物は、魔術信仰における悪魔の役割を詳述し、広める上で非常に重要だったと指摘する。例えば、悪魔が関わるサバトの場面は「不思議の書」以前の図像にはほとんど見られないが、17世紀になると数多く制作されるようになった。ヨーロッパ各地で、魔女の活動とその訴追に関する非常に類似したニュース報告が広まったことで、悪魔の力の根源について共通の認識を持つ、より学識があり神学的な魔女観への確信が促進されたのではないかとジーカは推測する。

第8章「キリスト教ヨーロッパの周縁について」では、魔術の図像がヨーロッパ社会の地理的または想像上の境界にいる人々を定義するためにどのように利用されたのか、そしてその過程が魔術イメージの発展をいかに大きく変容させたのかを検証している。16世紀後半以降、魔術と古典神話の神サトゥルヌスが結びつけられたことで、魔術の概念が普遍化され、アメリカ先住民などにもそのイメージが拡大された。同時にサトゥルヌスが象徴する暴力性や攻撃性に焦点を当てることで、魔術の本質が反キリスト教的・反社会的なものであることが強調された。こうした混同は、サトゥルヌスが持つ暴力、去勢、無秩序な想像力、社会的周縁性などの要素とともに、それぞれの国内の文化的部外者と外国の先住民を融合させる複雑な過程の一側面を示す、とジーカは主張する。

また、キリスト教以前の社会で広く実践されていた悪魔的な迷信としての魔術観は、スウェーデンの大司教オラウス・マグヌスによるスカンジナビア文化の民俗学誌『北方民族文化誌』(1555年)を通じて広まった。『北方民族文化誌』の重要な側面は、スカンジナビア諸民族の迷信、中でも悪魔に対する迷信的な崇拜を幻覚であると非難した点にある。また、同書には500枚近い膨大な数の木版画が挿絵として掲載されていた。これらの木版画の分析を通じてジーカは、人々が広く共有していた魔術の実践に対する懸念と、世界の様々な民族とその地域の社会的風習への関心が併存していたことについて、鋭い洞察を提示している。

本書は、従来の魔術研究では周縁的に扱われるだけであった魔術の図

像表現に焦点を合わせ、魔術の歴史を再構成しようとするものである。歴史家たちは魔術の図像を、テキストを活気づけるための挿絵か、そこで語られる悪魔学の見解や社会的慣習を裏付ける証拠としてしか見なさなかった、とジーカは指摘する。他方、美術史家たちは、画家たちのすべての作品の中で魔術の図像が占める位置と、特定の時代の美術史全般にそれらがどのような貢献をなしたのかについて考察してきたものの、16世紀後半に制作された図像はなぜか看過されてきた、とジーカは指摘する。以上の問題意識に基づいてジーカは、著名な画家だけでなく、あまり知られていない画家の作品についても検討することの重要性を述べ、その作業を実行しており、画期的であった、と評価できる。

それゆえ、本書は国内外問わず多くの研究者から高く評価され、刊行以来現在に至るまで、魔術の図像研究において強い影響を与えている。例えばイタリアの歴史家マッテオ・ドゥーニによれば、ジーカは多くの画家の作品を比較しながら、16世紀の魔女像の形成に、急成長しつつあった印刷産業が与えた影響を初めて体系的に明示した、とする<sup>2)</sup>。また、オーストラリアの歴史家ジャクリーン・ヴァン・ジェントは、ドイツやスイス、ネーデルラントの画家たちの作品に限定するのではなく、スカンジナビアのようなヨーロッパの周縁地域で制作された作品も検討することで、これまでの魔術に関する研究では看過されてきたヨーロッパ規模での魔術の視覚史を捉える可能性を開いた、とする<sup>3)</sup>。また、小林繁子氏は、ジーカがメディア間の相互関係、制作者側と鑑賞者側の間のコミュニケーションに関して、同時代的な影響関係だけでなく、通時的な発展にも目を向けている、と評価する<sup>4)</sup>。

ジーカが本書で16世紀に制作された多くの魔術の図像を詳細に分析し、視覚表現という観点から魔術の歴史を捉え直したことは、確かに意義深い。とりわけこれだけ多くの図像の中から、「大釜を囲む女性の集団」と「騎乗する魔女」という2つの視覚上の符号を見つけ出し、それらを魔術の視覚表現の発展の歴史において重要な要素として捉え、論じた点

2) Matteo Duni, "Reviews of Zika, *The Appearance of Witchcraft*", *Renaissance Quarterly*, 62-4, 2009, p. 1271.

3) Jacqueline Van Gent, "Current Trends in Historical Witchcraft Studies", *Journal of Religious History*, 35-4, 2011, p. 607.

4) 小林繁子「魔女研究の新動向：ドイツ近世史を中心に」『法制史研究』65号、2015年、125頁。

は卓抜である。これら2つの視覚上の符号で表象された魔女は、我々が思い浮かべる魔女の一般的なイメージにも近く、その淵源が明示されたことを高く評価すべきだろう。また、新たな魔術の視覚表現が南ドイツで発展したことと、同地域で起きた魔女迫害がヨーロッパの中でも際立って規模の大きなものとなった事実の間には、何らかの繋がりがあると思われる。南ドイツの人々の深層意識の中で、バルドゥングらが描き出した魔女像が何らかの形で作用していたのかもしれない。

一方で、筆者が本書に関してさらなる議論が必要であると感じた点も指摘しておきたい。ジーカは、16世紀後半の魔女裁判の件数の増加とともに魔女に関するパンフレットやビラが発行されるようになった、と論じるが、それらの流通状況や受け手の反応に関してはやや考察が乏しい。同時代の他の事象を扱ったパンフレットやビラのそれと比較することで、魔女を扱った印刷物が当時の人々にどのように捉えられていたが見えてくるのではないか。また、ジーカが冒頭で述べるように、本書は各章でテーマごとに論じる構成となっている。しかし、例えば16世紀初頭の魔術の図像を論じた第1章の後に、15世紀の魔術の図像を論じた第2章が来るなど時代が前後しており、一連の図像表現の変遷の流れが掴みにくいと感じる部分があった。

いずれにせよ、本書が扱う範囲は1590年代初頭までであり、魔術の図像はこれ以降も制作され続けた。そして、ジーカ自身が別の箇所でも指摘したように、17世紀以降、魔女裁判の件数が減少するにつれ、魔術の図像の主題は諷刺、パロディ、嘲笑へと変化していった。さらに18世紀になると、魔術の図像から魔術に関わる伝統的な言説は消え去り、画家たちは魔術という主題を用いて、自らの画家としての想像力、迷信と啓蒙思想、退廃とエロティシズム、自然と運命など他の主題を探究するようになった<sup>5)</sup>。このような17世紀以降の魔術の図像表現の発展を検討する上でも、本書でジーカが展開したような分析方法から学び、それを応用することが可能なのではないかと、と思われる。

---

5) Charles Zika, "Art and Visual Images", Richard M. Golden (ed.), *Encyclopedia of Witchcraft: The Western Tradition*, Santa Barbara, California, ABC-CLIO, 2006, p. 63.